

# 大人になるということ

——大江健三郎「飼育」の《僕》の加害性——

畑 中 佳 恵

## 一 はじめに——本稿の射程

「飼育」（『文學界』一二巻一号、一九五八年一月）は、大江健三郎が東京大学文学部に在学中の二三歳のときに発表した短編小説である。<sup>〔注〕</sup>主人公は大江と同様、戦時下の少年時代を都会から離れた谷間の小さな村で過ごした《僕》であり、時を経て自身の過去を回想する《僕》が語り手として物語を紡いでいく。以下、あらすじを簡単に紹介しておく。

梅雨が長引いたその夏、《僕》と弟は仮設火葬場の骨を漁っていた。二人が帰りに見た米軍機は山の中へ墜落し、村人の山狩りによって一人の敵兵が捕獲される。その黒人兵は村の共同倉庫の地下に収容され、上階に住む《僕》と家族が世話をすることになった。《僕》は黒人兵を飼うという発想に興奮する。食事を運ぶ際は肉体をつぶさに観察し、体臭に気持ちを高ぶらせた。《町》の役場の《書記》と呼ばれる男が村を訪れ、県庁から指示があるまで黒人兵を保管するよう告げると、村の人々は不安を抱いたものの、次第に黒人兵の存在に慣れていく。とくに子どもたちは黒人兵に夢中になった。黒人兵は《書記》の壊れた義肢を器用に修理したり、子どもたちと水浴

して卑猥な遊びに興じたりするようになる。《僕ら》は彼を素晴らしく家畜のように扱った。

ある日、再び村へやって来た《書記》が黒人兵を県に引き渡すことを告げると、黒人兵は《僕》を捕虜にして地下倉に立てこもった。《僕》の父をはじめとする大人たちは強引に地下へ踏み込み、拘束されていた《僕》の左手ごと黒人兵の頭を打ち砕く。《僕》は大人たちに吐き気を覚える一方、自分はどう子どもでもないと考えた。軍隊に連絡がつかないまま村で待機していた《書記》は、義肢を外して子どもたちの糧遊びに加わり、岩に衝突して死んだ。それを間近で目撃していた《僕》は、自分も村の大人たちと同じように死に慣れていたことを感じた。

この小説は周知の通り、昭和三三年度上半期の第三九回芥川賞を受賞した。選評からは、すでにメディアに露出している流行作家を賞の要件である「新人」とみなすかに議論が集中した様子<sup>〔注〕</sup>がうかがえる。その論点の背景には、作品そのものは受賞に値するという、大方の見解の一致があったのだろう。例えば選者の井上靖は、「発想は明確であるし、イメージを書いて行く力も非凡で、作全体に、若々しいエネルギーが漲っていて、佳作の名に恥じないと思う」と、抽

象的ではあるが言葉を尽くして称讃<sup>(注2)</sup>している。一方、わずかながら不満も述べており、なかでも《あらずもがなの場面》と評価したのが、小説末尾の《書記》の死だった。

この点については、作品発表とはほぼ同時に指摘がみられる。福永武彦は一九五七年一月に開かれた創作合評の場で、《書記》の死には無理があると述べた。《ぼくはてつきり主人公の少年が、書記の義肢を櫓に投げつけて殺すのかと思っていたが、そうじゃないんだね。書記は偶然に、唐突に、事故かなんかで死ぬ。いつたいそのことと「僕はもう子供ではない」というのと、どういう関係があるんだろう。殺すのなら、意味が関係づけられるが、これではどうも筋として必然性がないようだ<sup>(注3)</sup>》。子どもでなくなった《僕》は殺す側の人間。大人になる、という因果が成立しないのであれば、二つ目の死のエピソードは作品にとって瑕疵になるとの主張である。

同様の物言いは近年にも例がみられる。二〇二一年刊行の対談本『教養としての芥川賞』（青弓社、二〇二一年一月）で「飼育」を取り上げた重里徹也と助川幸逸郎も、大人から暴力を受けて大人になるという《僕》の受け身の姿勢に不満を示し、それと関わる問題点として《書記が突然に事故で死ぬことの違和感》（重里の発言、一六一頁）に言及している。《誰かに殺されるとかね。そういうふうにしないと。納得できないです》（同右）という意見に賛同する読者は、六六年前から現在にわたって決して少なくないだろう。

たしかに《僕》は圧倒的な暴力によって掌を碎かれた子どもであり、黒人兵に対するステロタイプの差別的な語り口を問題視されることはあつても、ストーリー上の位置づけは受け身の被害者として理解されるのが常<sup>(注4)</sup>だった。そのなかにあつて、過去を追想する語り手の

《僕》が、少年時代の自分に潜む「排他的で凶暴な（大人性）」を凝視<sup>(注5)</sup>しているとした川口隆行の論は《僕》の位置づけについて再考を促すものとして示唆深い。川口は過言を懸念しつつ、《僕》に黒人兵殺しの欲望が潜んでいた「可能性にさへ言及した。しかし、もしも《僕》に殺人の欲望と呼べるものが兆したとすれば、それは黒人兵が殺された後——《僕》自身の「子ども性」が失われた直後——に形をなしているのではないか。またそんな《僕》の「大人の」な欲望は、その時点で明確な敵として立ち現れた《書記》へと向けられ、彼の死を後押ししたのではないか。

本稿ではこのような関心のもと、《僕》が戦中の少年時代を語るなかで、自身の加害性を対象化している可能性について論じる。とくに着目したいのは、村の子ども「《僕ら》」として生きる《僕》が、とりわけ脚・足をつうじて自分たちの身体性や属性を自覚していた点、さらには櫓遊びという幻想的な戦争ごっこにおける脚・足の重要性を認識していた点である。小説後半で子どもとしての幻想を脱した《僕》にとって、左脚を欠く《書記》の戦争ごっこが死出の道となることは十分に予測可能であった。にも関わらず無言で傍観したことが、間接的な加害行為として語られていることを明らかにしたい。

本稿の構成は以下の通りである。次章では「飼育」研究史を振り返り、とくに《書記》の衝突死の件がどのように論じられてきたか確認する。そのうえで、第三章ではいくつかの先行論を参照しつつ、村の子どもたちを中心とした《僕ら》のコミュニケーションのありようや戦争との関係を整理する。また、ストーリーを追いつつ、黒人兵を迎え入れ充実感に満たされた《僕ら》の領域から《僕》が離

脱するまでの様相をとらえる。続く第四章では、『町』と村を行き来して働く『書記』の特徴をふまえ、大人である彼が子どもたちの櫓遊びに加わった理由を戦争と絡めて考察する。さらに、櫓に乗る『書記』を前にした『僕』の一連の行為は、未必の故意による見殺しであつたという新たな解釈を示す。

このような作業をつうじて、受け身の被害者にとどまらない加害者としての『僕』像をとらえることにより、子どもから大人へという変化をめぐる因果の整合性を可視化することができるだろう。また、蛇足とみなされがちな『書記』の死のエピソードについても、小説のプロット上、欠かすことのできない要素であるという見方を共有したいと考える。

## 二 「飼育」研究と『書記』の死

「飼育」が同時代に高い評価を得たことは前に述べたが、具体的な「飼育」論は、その神話的な世界観を指摘するところからスタートしたようである。例えば一九七〇年代には一條孝夫が、『黒人兵の死を媒介とする少年の再生のモチーフにみられる「飼育」の神話的展開』に注目し、「飼育」は戦争文学の要素よりも死と再生の神話的要素が濃いことを論じた。その際、二つ目の死となる『書記』の死については、『それ自体無意味で、気まぐれな試みの結果でしかない』と酷評している。川西政明も子どもたちの櫓遊びを眺める『僕』の心理描写を引きつつ、小説結末部の『やわな叙情性』と、『生の理由』をつかみきれない作者の姿勢を批判した。

一九八〇年代の黒古一夫論、越智良二論とも「神話的世界」を大

枠とするもので、それぞれ『僕』が子どもの世界から大人の世界へ移行する様相を論じた。『書記』の死については、その意義を抽象度を上げて理解する試みが散見されるようになる。越智は、『大人が子供の世界へ回帰することの不可能性』を象徴するエピソードとして理解し、ロバート・ロールフは、日本『書記』に代表される国家が敵（米軍の飛行機の尾翼）に敗北するという象徴性を読み取った。『書記』と国家の関係に注目した意味づけは、一九九〇年代の森野豊論にもみられる。森野は『書記』の唐突な死を語ることで、彼の背後にあった戦争遂行主体としての国家を浮かび上がらせるという語りの図式を示した。

二〇〇〇年代以降も、『書記』の死のエピソードは作品のあらすじ紹介において省略されたり、全集の解説文で言及されなかつたりするのが目に留まる。とくに一般読者向けを兼ねた文章においては、このエピソードを軽視する傾向が続いているといえるだろう。近年刊行された『教養としての芥川賞』（前掲、二〇二一年）もその一つであり、納得できないエピソードとして触れられていることは既述のとおりである。

他方、研究の領域においては『書記』にフォーカスした論考が目立つようになっていく。奥間勝也「告発するテクスト——大江健三郎「飼育」をめぐる視線と欲望の交錯——」（『琉球アジア社会文化研究』一二号、二〇〇九年一月、五一頁）は、片足がない「書記」の役割を具体的に考察したうえで、櫓遊びの際に『書記』が「身体の一部である義肢を「僕」に残したことは何かの譲渡とも読み取れる」と述べた。村のことを書き記し『町』に伝達するという役目を譲り受けた『僕』が現在の語り手となっているとの指摘は、作品構

造と関わる新たな観点として興味深い。論の整合性を吟味するなら、《僕》は樫が岩に衝突した後に義肢を投げ出しており、この点で譲渡が成立しているといえるかが問われるだろう。

高橋由貴「火葬される『書記』の死——大江健三郎『飼育』における戦争」（『国文学 解釈と鑑賞』七五巻九号、二〇一〇年九月）はタイトルどおり《書記》を中心的に取り上げ、《僕》との相似性を分析する論考である。《書記》の死については、《樫》という一見慣れた物に姿を窺したアメリカの敵機に義肢のない足を不用意に委ねて岩に激突する《こと》を、《日本人の『僕』が慣れからアメリカと接触して自らを損な》ったことのアレゴリカルな反復として読む可能性を示している（同右、一三七頁）。その場合、死後も微笑んでいた《書記》の心理をどう解釈するか、掌を潰された《僕》の心理と比してどう整理するかという点に、考察の余地が残るだろう。

以上の論考のほかにも、戦争について語った《書記》が死ぬことで《僕》は戦争に対してどのような立場を取るか自分で模索しなければならなくなると論じた北山敏秀<sup>（注15）</sup>論など、「飼育」における《書記》の死の問題は、近年の研究によって知見が積みまてきた。さらに吟味、探求すべきポイントもある程度可視化されてきたといえるだろう。この《書記》の死という問題を改めて検討するにあたり、次章ではまず、出来事に至るまでのストーリーの骨格を整理することにした。戦中の村の《僕ら》がどのような日常をおくっていたか、また黒人兵の豹変と殺害という出来事を経て《僕》に何が生じたか、先行研究を参照しながら確認していく。

### 三 戦時下の《僕》・黒人兵・大人たち

しかし戦争は、僕らにとって、村の若者たちの不在、時どき郵便配達夫が届けて来る戦死の通知ということにすぎなかった。戦争は硬い表皮と厚い果肉に浸透しなかった。最近になって村の上空を通過し始めた《敵》の飛行機も、僕らには珍しい鳥の一種にすぎないのだった。（『飼育』一二七頁）

「飼育」の語り手である《僕》は、黒人兵と接触する前の村の子どもたちにとって戦争は無関係な遠いものであったことを強調する。それは、遠方の洪水のようであった戦争が、黒人兵の暴力的な死を契機にして、谷間の子供たちの世界にまで奔入してくる、というのがモチーフの上での構成であった<sup>（注16）</sup>。という作者の自作解説とも重なるわけで、先行研究においても《戦争という異常事態からも取り残された山間の僻村<sup>（注17）</sup>》といった説明がよくなされてきた。しかしながら、《僕》が提示した具体例は、表面的な意味を裏返して受け取ることもできるだろう。村には出征し戦死した若者がたしかにいたのであり、村の上空を敵機が飛行するようにもなっていた。戦争は、村の子どもたちの生身の身体（表皮に覆われた果肉）に直接届かないまでも、彼らの身辺を静かに浸し、その認識や行動に働きかけていたのである。

例えば小説冒頭で語られるのは、《僕》と弟が《胸にかざる記事に使える形の良い骨》（二二五頁）を探す様子である。死と胸章を結びつける発想に、軍用品や軍人ひいては戦争への憧れが透けて見えることは言うまでもない。その遊びが《僕》の兄弟だけでなく村の子どもたちの間でブームとなっているらしいこと、入手できなかった

《僕》は仲間から力尽くで奪うつもりでいることも、《僕ら》がおぼろげとはいえ戦争のイメージに魅了されていることをうかがわせる。子どもたちが好む戦争ごっことしては、樅の木の《野鳥の卵の形をした毬果<sup>まうか</sup>》を《銃弾》として集め、互いの住み家に撃ち込むという遊びもあり（二二九頁）、後には、墜落した敵機の残骸に乗る遊びもこれに加わることになる。

村の《僕ら》の生活のなかに、戦争は夢想的なイメージを帯びてすでに存在していた。身体性をともなう乱暴なコミュニケーションが日常的になされていることも、これと無関係でないだろう。例えば、村の悪童として登場する《兎唇》は、飛行機墜落の件を知っているかと尋ねる際に、《僕》の肩を殴りつけて叫ぶ（二二八頁）。《僕》の言動も負けず劣らず暴力的で、共同水汲み場で微笑を向けてくる裸の女の子に対し、罵声と小石を浴びせている（二三〇頁）。このような荒々しいコミュニケーションに慣れた《僕ら》が、戦争に憧れを抱くのは自然な成り行きだったのか。あるいは戦争イメージの侵入によって、仲間同士のやりとりがいっそう粗野になったのか。いずれにせよ、《僕》は遠い戦争と関わりをもつて生きていたのであり、黒人兵の登場はその関わりを急進・変質させることになる。

さて、《僕ら》の村が《町》と対立的な上下関係にあり、村人が《汚い動物》（二二五頁）のように蔑まれている状況は、先行研究でもよく指摘されるところである。例えば森野豊は、<sup>注18</sup>《町》が村に向ける蔑視が、村が黒人兵に向ける蔑視に置換されているとする。そのような村と《町》の不均衡な関係性は、この物語がはじまる遙か以前から根深いものとしてあったように感じられるだろう。一方、村の内部において、美／醜などの二項対立的な線引きはゆるやかにし

か機能していないようにみえる。とくに子どもたちの価値判断は一貫しておらず、しばしば揺らぎをみせる。《兎口》が捕まえた山犬の仔犬を《白くていいな》（二二六頁）と羨望した《僕》は、舌の根も乾かぬうちに黒人兵を《黒い馬》や《黒い重油》（二四八頁）になぞらえ讃える自分に何ら違和感を抱かない。村の《僕ら》にとつて、どのような対象を美しく良いものと価値づけるかは予め決まっておらず、また白から黒へというように容易に反転しうるのである。敵／味方の線引きもあやふやであり、捕虜となった黒人兵の処遇について子ども同士で推測する際も、《僕》は自信のないまま敵という言葉の口にし、《兎口》はそれに反発した（二二二頁）。たとえ敵国の兵士であっても《僕ら》にとつての敵であるかは自明でないのである。

地下での食事の世話を通して実際に黒人兵を間近にした《僕》は、やはり、美／醜、敵／味方といった二項対立の一方に相手の存在を押し込めようとしないう。《すばらしい《獲物》》（一三九頁）という《僕》の評言には、崇拜と侮蔑、恐怖と楽観が入り交じっているだろう。黒人兵の《腐食性の毒》（一三九頁）のような体臭さえ、吐き気と類の火照りという両極端な反応を同時に起こさせるものとして、（そのアンビバレントな表象がマイク・モラスキーのいうステロタイプそのものであるとしても）、ネガティブに裁断されていない。《厚いゴム質の唇》、《黒く光る強靱な皮膚》、《縮れた短い髪》（一三八、一三九頁）といった身体部位を熱心に観察するばかりで、一人のトータルな人間として見定めようとしていない点も注目値する。奥間勝也（前掲）は、黒人兵の身体をめぐる《僕》の表現が過度に誇張されていることを指摘した。自他の差異とかかわる幻想混じりの観



察事実は未整理のまま持て余され、弟から《あいづ、どう?》と黒人兵についての感想を求められても、《とても臭うだけさ》(一三九頁)と部分的な差異を全体化してはぐらかすしかない。

小説ではこの後、とくに身体を介したコミュニケーションをつうじて、黒人兵と《僕》をはじめとする周囲との関係は大きく変化する。彼我に言葉による意思疎通が生じることではなく、手持ちの技術や身体的特徴の差異がいつそう可視化されるなか、それにもかかわらず一体感といえるものが生じるのである。まずは黒人兵が《書記》の壊れた義肢をうまく修理することで、《村の生活の一つの成分》(一四六頁)とみなされるようになった。さらに、鼬を処理する《僕》の父の仕事場では、その技術を見せる父と誇りに思う子と敬意を払う黒人兵とが《一つの家族のように結びついた》(一四七頁)。黒人兵と子どもたちが全裸で一緒に水浴し、性器や性行為への関心を露わに戯れ合う有名なシーンも、彼らが一体となって躍動する様が印象的である。

このように、敵国の兵士であり、異人種の外国人であり、言葉が通じず名前も不明のままの成人男性が、家族や仲間として迎え入れられ、とりわけ《僕ら》の領域を充実させたわけだが、その関係性はまだ一度大きく変動することになる。身の危険を察知した黒人兵によって《僕》は拘束され、捕虜となった。瞬時になされた敵/味方の線引きは錯綜し、《僕》は自分の敵と化した黒人兵に対して、そして《僕》の安全を顧みず地下に侵入してきた大人に対しても、《敵意を剥き出しに》(一五三頁)する。

父を含めて、あらゆる大人たちが僕には我慢できないのだった。歯を剥き出し、鉈をふるって僕に襲いかかった大人たち、それ

は奇怪で、僕の理解を拒み、嘔気を感じさせる。

(一五三―一五四頁)

血をたぎらせ武器を振りかざし、同じ村の子どもである自分を攻撃した大人たちに対し、《僕》は激しい拒絶反応を示した。大人/子どもとの境界を厳たるものとして意識に顕在化させた《僕》は、このとき、自分にとって現実的な敵/味方の線引きをも凝視している。その意味で、《僕》は幻想を剥き取られたリアルな戦争の現場に立っているのであり、子どもとしての世界との結びつきはここで断たれたといえるだろう。

《僕》の損傷箇所が掌であったことは、互いに撫で合い叩き合う村の子どもたちのコミュニケーションに欠かせない部位を欠いたという点で、ひどく象徴的にみえる。深い傷を負い寝込んだ《僕》は、羊膜のなかで我が身を再形成して外に出るイメージと格闘した(一五三頁)。越智良一(前掲)や佐藤博美も指摘するように、《僕》の変化を象徴する重要な場面だろう。すでに子どもでなくなった以上、醜く奇怪な大人へともがき出るしかない。二日かけてもがき出た場所、《僕》は《書記》と出会い直すことになる。

#### 四 見殺しにされた《書記》

村の《僕ら》にとって内なる領域へ容れることに慣れた外部の間が、黒人兵のほかにもう一人いた。《書記》と呼ばれる《片足の男》(一二五頁)である。《書記》は役人として国家権力を代行しうる立場だが、左の大腿部より下が義肢のため、国の兵士として力を行使する主体にはなれないという二重性をもっている。また、《町》

と村を越境して連絡する仕事を担っている点、《僕》を《蛙》（一三六、一五六頁）と呼んで親しく会話を交わし肩や腕を叩き合うなど（二三六頁）、大人の領域だけでなく子ども達の領域にも馴染んでいる点で、やはり二重性をもっている。<sup>注20</sup>

そんな《書記》が、暇を持て余していたとはいえず、《僕ら》の領域により深く踏み込むかたちで櫓遊びに参加したのはなぜだろうか。先行研究においては《気まぐれな試み》（一條孝夫、前掲七七頁）としてとらえるのが主流であり、それ以上に具体的な回答は示されていないようである。本稿では、黒人兵が《僕》を捕虜にして地下倉に立てこもり、その蓋を大人たちが壊し開けようとした場面に通って、《書記》の動機を考察していきたい。

立てこもりの場面で《僕》はわざわざ、《書記が義肢を軋ませて歩きまわる音も聞こえた》（一五二頁）と語っている。《書記》は、義肢の修理をつうじて自身も親しく交流した黒人兵が、一瞬のうちに獐猛な敵と化するのを目の当たりにしたが、それに続く、捕虜にした子ども達の掌ごと打ち殺される現場にも居合わせたことがわかる。前述のとおり、《書記》は戦争を遂行する一方で直接的な戦闘には参加できない人物である。<sup>注21</sup>しかし、《僕》の父が《銃をふるって戦争の血に体を酔わせ》（二五六頁）ていたように、その場の大人の一人として、自身の《戦争の血》の高鳴りを聞いたのではないだろうか。リアルな戦争（力による支配／被支配が繰り広げられ、人々の血が流れる現場）から排除されているからこそ、それを渴望するという心理機制は理解しやすい。彼が子どもたちの櫓遊びに心惹かれたのも、それが明らかに戦争への憧れを秘めた遊びだったからだだろう。自身がいかに血を高ぶらせても実際に味わうことのできない戦争の快楽、

その片鱗を幻想混じりに味わおうとしたのである。

その一方で、すでに子どもでなくなったという自覚を持つ《僕》の目に映っていたのは、幻想が剥がれた尾翼の残骸である。この場面をめぐる《僕》の語りが、尾翼に乗って滑り降りるための客観的条件——方向転換と重量の軽さ——に注意を促すものであることは見逃せない。

僕は古い桐の幹にもたれて子供らの遊びを見守った。彼らは、墜落した黒人兵の飛行機の尾翼を櫓にして、草原を滑降しているのだった。彼らは稜角の鋭い、すばらしい軽快さの櫓にまたがって、草原の上を若い獣のように滑降して行く。草原にところどころ突出する黒い岩に櫓がぶつかりそうになると少年の裸の足が草原を蹴りつけて櫓に方向転換させるのだ。子供の一人が櫓を引きずりあげて来る時には、もう下りの櫓の通ったあとを押しひしがれた草がゆっくり起きあがって、勇敢な少年の航跡をあいまいにしてしまう。それほど子供らと櫓は軽いのだ。

（一五五頁）

第二次大戦で大量投入されたB29の尾翼は、一般的な飛行機と同様に方向転換の役割をもつ。<sup>注22</sup>実際の操縦においては、操縦席足元にある左右二つの方向舵ペダルで、垂直尾翼後方の可動翼（方向舵）を動かす。右足でペダルを踏み込むと方向舵が右へ動き、機首が右方を向く。同様に、左足で左方へと針路を調整することができる。作中の子どもたちの櫓は、すでに方向舵ペダルとの連結が断たれた尾翼の残骸なので、舵をとるため自身の足で直接地面を蹴るのである。ここでは、両者ともに脚・足による操縦が必須であることを覚えておきたい。

櫛遊びを見て、「お前が考え出したんだと思っていたがなあ」と話しかけてきた《書記》に対し、《僕》が《頑なに黙って》（二五六頁）否定しなかったことは、読み手にとって重要な情報である。《僕》はこの遊びの考案者であり、それゆえに脚・足の重要性は熟知していたとみるべきだろう。下肢のバランスを欠く《書記》が、成人の体重によって急速に滑降するさなか、子どもたちと同じように易々と方向転換できるはずもない。それをその場で容易に推測でき、告げることのできた唯一の人間が、《僕》だったのだ。

そもそも、村や山を生活の場としてもつばら裸足で過ごす上で、脚・足の健やかさや強靱さは欠かせない条件である。《僕》は自分の能力を推し量る際、何よりも自分の頑丈な脚部に意識を向けていた。例えば、大人たちの山狩りについて行けなかったときには《うなだれて、朝の光に焼けている数石の上の自分の裸の足、その短くて頑丈な指を見つめた》（二二九頁）し、黒人兵に食事を運ぶ際には《頑丈で褐色の両脚が震える》（二三七頁）のを恥じた。また黒人兵を信頼したことで窮地に立たされた自身の状態を、《自分を捕えた罠が信じられないで、傷ついた足首をしめつける鉄の鉢はさみを見つめている間に衰弱して死んでしまう野兎の仔》（二五一頁）に例え、足を拘束されているという、事実と異なるイメージによって無力さを語っている。比喩によって自身と結びつけたのが、健脚な動物である《野兎》だったことも看過できない。同じく健脚のイメージをもつ《蛙》という綽名を鑑みても、脚・足は《僕》の自己認識に大きな位置を占めていることがうかがえるだろう。<sup>注四</sup>

自己認識と深く関わる要素は当然ながら、他者認識とも深く関わるはずである。《僕》は黒人兵をはじめ見て見た時、その足首の猪鬃よ

りも先に、《髹なめした黒い皮の飛行靴》ではなく《重そうで不恰好な靴》をはいていることに気づいた（二三一頁）。また、父と《町》へ行くときは《ふだんは決して使わない布の運動靴》（二二三頁）をはき、そこで少女を見かけると、他者の領域における自身の正常さを認めさせるかのように《靴をはいた両足を前に突きだ》す（二三六頁）。地下倉に踏み込んだ荒々しい大人たちの存在も真つ先に、《指の背まで剛毛におおわれた泥まみれの裸足》（二五三頁）として把握した。

ここで再び櫛遊びの場面に注目すると、《僕》は背後から近寄ってきた《書記》の方を振り向かず、《眼だけで僕の裸の臍の横にしっかり立っている書記の、黒い義肢を窺った》（二五六頁）。ここでも自他の存在と差異は、並んだ脚をつうじて意識されている。書記は遊びによって義肢が故障することを怖れたのだろう（修理できる黒人兵はもういない）、義肢を外しはじめ、《僕はそれを見つめていた》（二五六頁）。黙ったままの《僕》は、舵取りの重要性について教えないばかりか、不自由な腕で難儀しながら《書記》の義肢を下方へと運ぶ。それは、ゴール地点に着いた《書記》が使うための配慮としてイメージできると同時に、《書記》にとつての命綱を遠ざける行為としてもイメージすることができよう。このとき、《すでに夜だった》（二五七頁）。

作中には、《書記》が義肢を達者に使いこなす姿が幾度か登場したが、村へ来る途中に林で転び崖から落ちてしまったという、ささやかな事件も織り込まれている。そのとき《僕ら》は、《黒人兵を連れて行くために来たのなら、崖の下に倒れたまま見つけられず、餓死してくれたらよかったのに》（一四五頁）と一瞬考えた。後の《書



《記》の死への伏線として読むことができるこの場面で、子どもたちの一時の感情的な反応として、また現実には反するかたちで、《書記》の死はひとつが想像されたのである。そして今、《僕》は一切の想像を排して橈遊びのリアルな条件に目を凝らし、死にゆく《書記》をただ見守っている。村の大人たちが地下倉をこじ開けることをやめないと分かった瞬間、《大人》たちは僕が黒人兵に絞め殺されるのを見殺しにして（二五二頁）いると悟り、憤り、絶望の涙を流した《僕》は、その非情さを十分に味わったうえで今度は見殺しにする側に立ったのだ。

そのときの《書記》は《僕》にとって、過去の親しいやりとりや積み上げてきた関係性から切り離して見定めるべき、一人の大人だった。彼は混乱が収まり次第、自身の役目を果たすため、黒人兵の処遇をめぐる村の命令違反を県や市の軍隊に伝えるだろう。《僕》はそれまで《僕ら》の領域で慣れ親しんできた《書記》を、村の命運を握る敵として認定し、その衝突死を未必の故意により黙認した。死体の保管場所にひたすら柵を作り続けるというかたちで集団のなかに埋没し、無意味な時間つぶしをし、つまりは現実逃避をしている村の大人たちの誰よりも、「大人」として振る舞ったのである。

そんな《僕》の姿は、方向舵を操る足を欠くため現実の戦闘機に乘れないかわりに、橈としての尾翼を操縦しようとした《書記》との対比においても際立ってみえる。夢のような一瞬を得て死後も満足げに微笑む《書記》は、《僕》が離脱した「子ども」の世界に片足を残し続けたまま逝ったのである。

## 五 おわりに — 《僕》が大人になるということ

本稿では、これまで解釈の主流となってきた被害者としての《僕》像の先に、敵を見定め暴力的に排除するという戦争の論理を実行する者、すなわち加害者としての《僕》像が生起するさまをとらえた。小説末尾で《僕》は、《昏れのこっている狭く白い空を涙のたまった眼で見あげ》ている（二五七頁）。作者は後年に「飼育」を振り返った際、《いま読みかえてみると、風景にも人物にも、多くの村の戦時の思い出とかさなりあっているものが数かずある》と述べた。風景のなかでもとくに夕焼けの空は、村の少国民だった大江にとって、遠方の戦火や死傷者の血の朱色を映すスクリーンであつたという。

ぼくはその原因のわからない熱病にかかったけれども、熱にうかされたぼくの頭にうかぶ幻影は、谷間の空をおおう夕焼けた空の雲が、そのまま南方の戦場を映しだしていて、目をこらすと、そこで爆弾が炸裂したり、人々がひどく傷ついたり死んだりするのが見えてくる、そのような悪夢だった。

〔僕の戦争文学〕四四五頁

「飼育」の谷間に敵たる《書記》の《どろどろした濃い血》（二五七頁）が流れたとき、《僕》の頭上の空は幻も夢も何も映さず、ただ白い。その白い空を見上げる《僕》は、決定的な出来事とそれによる不可逆の変化を経た者として、失ってしまったものを哀惜しているようにみえる。自ら吐き気を催す存在へと「成長」し、リアルな戦争の一部として力を行使した《僕》が、そうなる前の幻影的な空を見上げることはもう二度と叶わないからだ。

少年時代の《僕》が出来事の渦中で自身をどこまで対象化していたかは、厳密にいえば不明とすべきだろう。しかし少なくとも、時を経て追想する《僕》の語りのなかには、かつて間接的とはいえ深く関与した二つの死が、糊塗しえない事実として埋め込まれている。大人になるとは、敵と味方を選別し、目の前の他者にためらうことなく力をふるう者になること——そのようにして現実立つことであるなら、《僕ら》の領域を後にした《僕》も決して例外でなかった。《飼育》で語られた《僕》の変化は、被害と加害を一連なりのものとして経験するなかで生じた「大人」化という「成長」であり、それと関わるエピソードの整合性に綻びが生じているとは言いがたい。本作に欠けていとされてきた《僕》の加害性、および《書記》の死の必然性は、このようなかたちで確かに見いだすことができるのである。

## 注

- (1) 「飼育」は『文學界』の「長編小説特集」の一篇として発表されたが、原稿用紙一〇枚のため短編に分類されることが多い。発表後は短編集『死者の奢り』（文藝春秋新社、一九五八年三月）に収録され、翌年に文庫化された。『昭和戦争文学全集 11』（集英社、一九六五年五月）、『芥川賞全集 第五卷』（文藝春秋、一九八二年六月）など多くの全集や作品集に収録されている。本稿の引用はすべて『大江健三郎全小説 1』（講談社、二〇一八年九月）所収の本文に拠る。井上靖「いっぱいの初々しさ」（『芥川賞選評』『文藝春秋』三六卷一〇号、一九五八年九月、三二一頁）
- (2)
- (3) 中村眞二郎・福永武彦・加藤周一「創作合評（129回）1957.12.16」（『群像』一三卷二号、一九五八年二月、二五〇頁）。なお、『飼育』を掲載した『文學界』の印刷は奥付によると二月二〇日であり、合評会は作品発表に先んじて開かれたようである。
- (4) 例えば、武藤功「ささやかなこと二つ二つ——大江健三郎の短篇『飼育』に即して」（『葦牙』二八号、二〇〇二年八月）、マイク・モラスキー「占領の記憶／記憶の占領 戦後沖縄・日本とアメリカ」（鈴木直子訳、青土社、二〇〇六年三月）など。
- (5) 例えば、黒人兵という他者に影響を受けた《僕》の生の充足が、大人たちによって不条理に破壊されるとする、吉田俊彦「飼育」（大江健三郎）考」（『岡山県立短期大学紀要』三三卷一、一九八九年六月）など。
- (6) 川口隆行「大江健三郎『飼育』論——〈身体〉を軸として——」（『広島大学 日本語教育学科紀要』五号、一九九五年三月、一一一頁）
- (7) 一條孝夫「〈期待〉と〈恐怖〉の形象——『飼育』の世界——」（『森山重雄編『日本文学 起源から現代へ』笠間書院、一九七八年九月／一條孝夫『大江健三郎——その文学世界と背景——』和泉書院、一九九七年二月、七六、七七頁）
- (8) 川西政明「谷間の村の虚構性」（『国文学』一九七九年二月号／『大江健三郎論 未成の夢』講談社、一九七九年一〇月、一七六頁）
- (9) 黒古一夫「大江健三郎論——森の思想と生き方の原理」（彩流社、一九八九年八月）
- (10) 越智良二「大江健三郎『飼育』私解——付、高校時代の詩「別れ」に就て」（『愛媛国文研究』三九号、一九八九年二月、六六頁）
- (11) ロバート・ロール「『飼育』に於ける無垢の喪失」（武田勝彦ほか編

- 著『大江健三郎文学 海外の評価』創林社、一九八七年一月）
- (12) 森野豊「大江健三郎『飼育』と postcolonial——鈍色のユートピアの彼方——」（『大阪大学言語文化学』六号、一九九七年三月）
- (13) 篠井英介「読んでおくべき／おすすめの短編小説50 外国と日本 大江健三郎『飼育』（『國文學 解釈と教材の研究』五二巻二三号、二〇〇七年一〇月）で紹介されるあらすじは、『僕』の掌が打ち碎かれる場面までである。
- (14) 尾崎真理子「よろしい、僕は地獄に行こう！」（『大江健三郎全小説1』講談社、二〇一八年九月）
- (15) 北山敏秀「世代」的な表象の手前で——大江健三郎『飼育』における『戦争』の意味——（『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』五一号、二〇二一年一月）
- (16) 大江健三郎「僕の戦争文学」（『厳肅な綱渡り 全エッセイ集』文藝春秋、一九六五年三月、四四四～四四五頁）
- (17) 黒宮 夫「大江健三郎論——森の思想と生き方の原理」（前掲、一二八頁）
- (18) 森野豊「大江健三郎『飼育』と postcolonial——鈍色のユートピアの彼方——」（前掲、一五一頁）
- (19) 佐藤博美「大江健三郎『飼育』論——回想された「僕」の心理変化——」（『盛岡大学日本文学会研究会報告』七号、一九九九年三月、五七頁）
- (20) 『書記』が境界を行き来する者、二重性をもつ媒介者であることに ついては、ノーマ・フィールド「ネイティブとエイリアン・汝と我——大江健三郎の神話・近代・虚構」（『文藝界』一九八九年一月号）、奥間勝也「告発するテクスト——大江健三郎『飼育』をめぐる視線と

- 欲望の交錯——」（前掲）、高橋由貴「火葬される「書記」の死——大江健三郎『飼育』における戦争」（前掲）などに指摘がある。
- なお、「身体」をキーワードとする川口論（前掲）は村の大人の領域と『僕ら』子どもの領域の関係性について、差異は認められるが完全に分化しているわけではないと整理する。村の内部における二項対立的な関係をゆるやかで流動的なものとみる本稿においても、『町』／村の關係と大人／子どもの關係を相似形でとらえているわけではないことを付記したい。第三章で述べたように、大人に襲われた『僕』によって、大人／子どもの線引きは敵／味方の線引きとともに改めて対象化されることになる。
- (21) この点に関して奥間論（前掲）は、『書記』は戦争で片足を失い、帰って来た元兵士ではないかと推測した。作中に根拠が見つからないため、ここでは紹介するにとどめる。
- (22) B 29の機体と操縦については、米陸軍航空隊編著『B 29 操縦マニュアル』（仲村明子・小野洋訳、光人社、一九九九年七月）を参照した。
- (23) 『蛙』という渾名については、武藤功「ささやかなこと二つ——大江健三郎の短篇『飼育』に即して」（前掲、一六二頁）が、『単に蛙のように飛び跳ねる元気な子供というほどの意味からきたのか、それとも蛙の子は蛙と言われるように親に似た子供というほどの意味でつけられたのか』と推測している。
- (24) 大江健三郎「僕の戦争文学」（前掲、四四五頁）